

『孔子』と『阿Q』の死闘

魯迅のリアリズム



三書房

魯迅のリアリズム

『孔子』と『阿Q』の死闘

片山智行

片 山 智 行
かた やま とも ゆき

1932年 大阪市に生まれる

1958年 東京大学文学部中国文学科卒業

大阪市立大学大学院文学研究科修了

現 在 大阪市立大学文学部教授 中国文学専攻

訳 書 『魯迅雑文集』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ（1976, 78, 79 龍溪書舎）ほか

現住所 兵庫県芦屋市奥池町25-20

魯迅のリアリズム

Printed in Japan

1985年4月15日 第1版第1刷発行

著 者 片 山 智 行
© 1985年

発行者 荒 木 和 夫

印刷所 株式会社 新 栄 堂

製本所 株式会社 鈴木製本所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 03(291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 9 - 8 4 1 6 0 番

郵便番号 101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

目次

序	五
---	---

第一部 魯迅のリアリズム(1)——その本領——	三
-------------------------	---

第一章 魯迅の儒教批判	三
-------------	---

第二章 「反虚偽」の精神	四
--------------	---

第三章 「水に落ちた犬をたたく」の精神	七
---------------------	---

第四章 「魯迅と革命文学」補論	六
-----------------	---

第五章 「魯迅と革命文学」補論の補論——丸山昇氏にあえて答える——	三
-----------------------------------	---

第六章 「国防文学論戦」の側面	一五
-----------------	----

第二部 魯迅のリアリズム(2)——その系譜——	一五
-------------------------	----

第一章 その系譜Ⅰ 辛亥革命前夜——鄭容、章炳麟、譚嗣同を中心に——	一五
------------------------------------	----

第二章	その系譜Ⅱ	五・四新文化運動期——李大釗、陳独秀、易白沙、吳虞を中心に——	三三
第三部	作品の世界		二六七
第一章	『呐喊』論		二六七
第二章	『彷徨』論		三二三
第三章	『故事新編』論		三四七
魯迅略年譜			三九一
あとがき			四〇九

魯迅のリアリズム

序

魯迅^{レイシュン}は今日なお読むものが読めば恐ろしいまでに新鮮な衝撃を与えてくれる。武田泰淳はかつて『L 恐怖症』という随筆のなかで、トルストイ、ドストエフスキー、魯迅の三者を並べ、「ところが三番目の中国人がえらく行儀がわるくて、パッパッ血なまぐさい唾を吐きかけやがってさ、気色の悪い、二人称で呼びかけるんだ。憎まれっ子世にはびこるとは、このこったよ」と、その点についてなまなましく告白している。これにむべなるかなとうなずくものも、おそらく少なくはないであろう。

魯迅は自分が必要と認めたときには、もっとも困難な状況のなかでも筆を執り、それによって肉体的精神的に満身創痍になることを恐れなかった。かれは病床にあっても新聞雑誌に眼をひからせ、問題を感ずるとただちに筆を執った。その仕事はじつに死の直前までつづいている。最後の作品にいたっては死の二日まえに書かれたものであり、魯迅が最晩年までいかに強靱な精神で生き、「一人称で呼びかけ」、たたかいつづけたか、如実に見てとることができる。「もしヨーロッパ人なら五年まえにすでに死んでいただろう」と診断されたほどの肺の宿痼と喘息その他数えきれないほどの内臓疾患に犯されながら、かれはいささかの情気も感じさせない緻密な文章を書きつづけ、最後まで精神的緊張を持続した。普通の人間ならちょっとした風邪で寝こんでも、たちまちペンを執る氣力を失ってしまうのに、かれは生死の境をさまようような大病のあとでも、精神的勤勉さをすぐとり戻し、『これも生活だ……』(36)というような、みずからの体験を深刻にかつ微妙に分析した文章を書いているのである。しかも、その終りのほうでは外界の現実^{（36）}に眼を向けて、新聞雑誌で見た論敵の動きにするどい批判さえ加えている。

さらにその十日あまりあとの『死』においては、あの有名な遺言(稿)を書き、ヨーロッパ人がよく

臨終に際して他人に許しを請い、自分も他人を許すといった儀式を行なうが、自分ならどうするだろうかと仮定して、つぎのようにいつているのである。「わたしの敵は多いほうだが、もし新しがり屋がわたしにたずねてきたら、どのように答えようか？ わたしはちょっと考えて、決めた。恨ませておけ、わたしだってひとりも許しはしない。」

魯迅はこの十年以上まえに述べた「水に落ちた犬をたたけ」の精神と同質の新鮮な戦闘精神を死をまえにしてもなおみごとに維持しており、すこしも精神の弛緩を感じさせない。かれのこうした気力の充実は、なんといっても生涯一貫したものととして、まず注目しなければならぬ特徴であろう。魯迅の晩年よき配偶者としてかれとともに暮した許広平は、かれの死後、『あなたはなにが休息であり、なにが娯楽であるか、知らない。仕事、仕事！ 死の前日もなお筆を執っていた』と詠じている。

魯迅が晩年にもっとも精力をそそいだのは、いわゆる「国防文学論戦」であった。その具体的な実例はかれの命を縮めたとさえいわれる『徐懋庸に答え、あわせて抗日統一戦線の問題について』（36）において見られるが、これを読むなら、だれしも魯迅の慳たがねのごとき精神の強靱さを感じないわけにいかないであろう。かれはいかにも文学者にふさわしく、理論を抽象的にふり廻すことなく、みずからの経験を踏まえていちいち具体的に、すこしの隙もない緊迫した筆致で、みごとに相手を批判している。周揚チウヤウら「四人の男」が自動車で乗りつけて、転向者の穆木天モクキテンの言を理由に、胡風フフウのことを「内通者」と中傷した事件など、その一例であろう。じつをいって、魯迅はこうした卑劣なやりくちをもっとも憎んでいたのであった。

中傷やデマは多くの場合は権力側のいぬたちの用いる武器であり、かれらはさらに権力行為やその変形である暴力を背景にして左翼陣営を切り崩そうとした。魯迅はかれらのそうした攻撃にたいして「思

わせぶりな、煮えきらない」文章しか書けなかったが、数知れぬ筆名を使って執拗に応戦したのである。そのなまなましい模様は、『偽自由書』後記（33）や『准風月談』後記（34）など雑感集の「後記」や「序言」のたぐいでよく見てとれるであろう（それにしても、「後記」では新聞記事などを多く引用し、資料をして現実のなまの姿を語らしめているが、こうした手法は『中国小説史略』の場合と同じく、いかにも魯迅らしい着実なやりかたといわなければならない）。

魯迅がたたかわなければならなかった敵は、さまざまに形を変えて中国社会に現われた。最初の敵はなんとといっても中国封建支配体制の中央に鎮座しました儒教であり、つづいて近代主義的衣裳のもとに旧体制を保守しようとした「現代評論」派がかれの眼前にあった。さらに、魯迅が論争しなければならなかった相手には、「革命文学論争」における創造社、太陽社があったし、そのじつ国民党反動派の売国的文学運動にすぎない「民族主義文学」や、「民族主義文学」を批判しながらも実質はブルジョア文芸自由論にはかならない「第三種人」や「自由人」、それに「閑情」の小品文を提唱した「論語」派などがあった。そして、最後には壮絶な論争にならざるをえない、革命陣営内の「国防文学論戦」がそれを待ち受けていたのである。

こうして見ると、魯迅における論争の文章が、いかに魯迅文学において大きな位置を占めるものであるかわかるであろう。ここではまず、論争の文章をも含めて、魯迅が多用してひとつの文学ジャンルにまで高めたいわゆる「雑文」について見てみよう。

*

魯迅の雑文（ここでは広義に「雑感」をも含める）を考えると、瞿秋白が『魯迅雑感選集』序言』

(33)で述べていることばを見逃すわけにはいかない。かれはそれを一種の「社会論文」(publicist article)といい、また「戦鬪的フイユトン」(feuilleton)「文芸記事」ともいっている。そして、さらに説明を加えて、「雑感という文体は、魯迅によって文芸性のある論文(feuilleton)の代名詞に変わろうとしている。もちろん、これは創作にとって代わることはできないが、しかしその特徴は、いっそう直接的にいっそう迅速に、社会の日常の事件に反応することである」と述べている。

それでは、なぜ魯迅がそのようなスタイルをかれの文筆活動においてもっとも多用したか、というところが問題となってくるであろう。この点について考えるまえに、かれがどれほど雑文を書いているか、整理してみる必要がある。『魯迅全集』の排列に準じて、ほぼ年代順に並べると、以下のごとくになる(カッコのなかは出版の年であるが、執筆されたのは、その年のもの、前年、前前年のものなど。ただし、『墳』や『集外集』のように長期間にわたって集録されている場合もある)。

『墳』(一九二七年)

『熱風』(一九二五年)

『華蓋集』(一九二六年)

『華蓋集続編』(一九二七年)

『而已集』(一九二八年)

『三閑集』(一九三二年)

『二心集』(一九三二年)

『南腔北調集』(一九三四年)

『偽自由書』（一九三三年）

『准風月談』（一九三四年）

『花辺文学』（一九三六年）

『且介亭雜文』（一九三七年。死後出版）

『且介亭雜文二集』（一九三七年。死後出版）

『且介亭雜文末編』（一九三七年。許広平が編集継続、死後出版）

『集外集』（一九三五年。楊霽雲^{ヤンサイユン}編集、魯迅校訂）

『集外集拾遺』（一九三八年。許広平編集、死後出版）

『集外集拾遺補編』（一九八一年。新版魯迅全集）

これを見ると、魯迅が小説集『呐喊』『彷徨』『故事新編』、詩集『野草』、自伝的回想記『朝花夕拾』にたいして、いかに多くの雑文を書いたかがわかるであろう。これは分量的にいうならば、それらの数倍に及ぶものであり、魯迅の文筆活動においてきわめて重要な意味を持つものといわなければならない。とくに後期の十年間、魯迅の文筆活動は圧倒的にこのスタイルによってなされている（このほか、魯迅の業績には、『中国小説史略』を主著とする文学史の研究があり、若き日に訳した『域外小説集』から始まる膨大な量の翻訳がある。それに、許広平との往復書翰『两地書』をはじめとする書信や日記なども、注目すべき遺産といえるであろう）。

さて、ふたたび魯迅がなぜ雑文を多用したかの問題に戻ると、瞿秋白はつぎのように述べている。
「だれしもこの二十年來の状況を考えてみると、このような文体の発生した原因が理解できるのである。」

あわただしく激烈な社会闘争は、作家がゆったりと落ち着いてかれの思想と情感を創作のなかにとこしこみ、具体的な形象と典型のなかに表現することを不可能にした。同時に、残酷で強暴な圧力は、また作家の言論に通常の形式を採ることを許さなかった。」

たしかに瞿秋白のいうような条件があったにちがいない。すさまじい状況のなかで、偽名を使ってでも、中国革命を阻害する敵に即刻反撃を加えねばならない必要があったであろう。現実を凝視し、現実と密着して敵とたたかいつづけた魯迅にとっては、雑文のスタイルがもっともふさわしかったのである。だが、もう一方では、より内面的な問題として、竹内好氏が指摘していることも考慮せざるをえない。氏はつぎのように述べている。

魯迅は文学者であった。何よりも文学者であった。彼は啓蒙者であり、学者であり、政治家であるが、彼は文学者であることによって、つまりそれらを棄てたことによって、現れとしてそれらであった。教育者、宗教者であるのも、そのためである。文学者と呼ぶ以外に呼びようのない根本の一つの態度が、彼にはある。小説さえも、彼は棄てていたかに見える。小説や批評に対象世界を構成しえぬほどに、彼の苦しみは、深かったのである。『熱風』『華蓋集』以下に連る一聯の雑感集は、その苦しみが生み出した。それらは、過半は論争の文字であり、『而已集』『三閑集』『二心集』『偽自由書』『准風月談』『花边文学』等の題名の由来が示すように、書物自体が本質的に論争集である。彼は苦しみの表白のために、論争の相手を求めたのである。小説を書くのも苦しみのためであり、論争も苦しみのためである。小説に吐き尽せぬ苦しみの棄て場を、論争に求めたのである。（竹内好『魯迅』44）

この含蓄あることばをただちにすべて了解することは、かならずしも容易ではない。氏の使用している「文学者」ということばがいかに広義なものであるかは、この引用の最初の部分を読んだだけでもある程度わかるであろう。要するに、魯迅の雑文は「社会論文」であるとはいえ、決して自己存在と切り離されたものではない。それにしても、「小説や批評に対象世界を構成しえぬほどに、彼の苦しみは深かったのである」という場合の、魯迅の「苦しみ」がいったいどのような内容を指すのか、これは簡単に説明できるものではない。案外、ひとによっては解釈が違ってくるのではないか、とさえ思われるところであって、これはやはり各人が努力して検討していくよりほかないであろう。

なぜ魯迅が雑文というスタイルを多用したか、という問題は、以上に見た瞿秋白と竹内好氏の説明によってほぼ解決されたかに思えるが、なおすこしつけ加えるべきことがあるにはある。それは魯迅の文学観（それと切り離しては考えられない革命観も含めて）と緊密に関連している、ということである。

魯迅は文学活動を開始して以来、一度も「芸術至上主義」の立場をとったことはない。かれの文学は基本的に、帝国主義列強の侵略にあり、かつ清朝の支配下にあった中国をいかに解放するかという主題、「阿Q」を含む民衆の真の自立を不可欠の条件とする中国の革命という主題、から離れたことはないのであり、そのことは裏を返していうと、魯迅においては文学的世界の構築がすべてに優先するものではなかった、ということを意味している。すなわち、中国の革命という現実的行為と切り離されたところで、かれは文学の永遠性を求めて創作に励む、といったことをしていないのである。したがって、状況がかれに論争を要請したとき、かれはかならずしも創作に拘泥することなく、それに対応していった。かれははっきりとおのれの任務を自覚し、そのためにはあえて「雑感家」という蔑称をも甘受したのである。この問題に関連して、魯迅の講演のつぎのことばを味わってみるのもむだではないであろう。

ましてプロレタリア文学は、プロレタリア階級の解放闘争の一翼であって、プロレタリア階級の社会的勢力の成長に従って成長するものであり、プロレタリア階級の社会的地位が低いときに、プロレタリア文学の文壇的地位が高いというのは、プロレタリア文学者がプロレタリア階級から離れ、旧社会に舞い戻った、ということを経明しているにはかなりません。(『左翼作家連盟にたいする意見』、30)

魯迅は自分の「社会的地位」「文壇的地位」を確保することよりもっと大切な任務を問題にしていたのである。ここで注意しておかなければならないのは、かれはその任務を外_レ在_レ的_レ批判_レという形で片づけたのではない、ということであり、この点に関しては、さきに引用した竹内好氏の文章からもわかるであろう。またいささか文脈が竹内好氏とは異なるにせよ、瞿秋白が「文芸性のある論文」といっているのも、このことと無関係ではない。要するに、魯迅が雑文というスタイルを多用したのは、みずからの文学観(革命観)の必然として、状況のなかで最善の文筆活動を行なったことから生じたにすぎない。かれにおいては、雑文も創作とまったく同じレベルの文学活動であり、かつその自己否定的でさえある誠実な行動によって、かれの雑文にかえて創作に劣らない文学性をもたらしことになったのである。形式によって文学の真価が左右されるものではない、ということは、当然といえば当然であるが、かれほどみごとに竹内好氏のいう「文学者」として雑文を書きつづけたものはほかにいないであろう(ただし、ゴリキーの社会論文、サルトルの『シチュアション』などがいささかこれに近いかもしれない)。かれは雑文を武器として、四千年来の「食人」社会、帝国主義、買弁的ブルジョア文化人、にせマルクス主義者など、中国の革命を阻害するいっさいの敵と容赦なくたたかいつづけたのであった。なんらの

「特權」を期待することなく、あくまで革命の深化をめざして前進した魯迅であつたればこそ、雜文という形式にこれほどの「文芸性」（広義の）を持たせたのである。

*

魯迅の偉大さとして考えられることは、いわゆる魯迅精神の中核をなす、『フェアブレイは時期尚早だ』（25）のなかで主張された「水に落ちた犬をたたけ」の精神である。これは文化大革命の際に大いに叫ばれたスローガンであるが、この精神は革命の継続と深化という主題と結びつくとき、今日なお意義を持つものといえるであろう。魯迅はレーニンが重要なことは、敵を消滅させるようにすること。

なぜなら敵はいまは負けただけであつて、敵の消滅にはまだほど遠いからである」といつているのを引用したことがあるが、レーニンのことばと魯迅の「水に落ちた犬をたたけ」の精神とは、まさにこの「革命の継続と深化」という主題において一致しているのである。革命が勝利し、政治経済面で法令や制度が変わつても、それだけで敵が「消滅」したわけでは決してない。「革命」が行なわれた解放後の中国においても何回となく整風運動が行なわれ、文化大革命をさえ必要としたのは（さらにまた新たな改革を必要とするであろうことは）、まさしくこのことによる。これはマルクス主義の知識を身につけたからといってすぐにマルクス主義者になれるものではなく、また共産党の組織にはいったからといってすぐに共産主義者になれるものでもない、という問題とすこしも異なるところはない。

こうして見ると、魯迅の「水に落ちた犬をたたけ」の精神は、かれのするどいリアリズムの精神と深い関係にあることがわかるであろう。かれのリアリズムの本領は、一時的な現象や「名」に幻惑されないうところにある。かれは「名」の奥にある「実」、すなわち化の皮の底にある実体（現実的機能）を決

して見逃すことはなかった。たとえば、支配者の唱える「仁義道德」「寛容」「慈悲」「王道」等々の実体はいったいいかなるものであったか？「礼教食人」「孝」や「節」など儒教道德（礼教）の実体は、そのじつ『ひとがひとを食う』にはかならない」と喝破したかれの最初の小説『狂人日記』は、まさにこのことをテーマにしたものであった。かれのリアリズムの精神は、それ以後もあらゆる問題において「名」の奥にある「実」を見ようとした。これこそかれの「寸鉄ひとを殺し、一刀血を見る」匕首をみかく砥石であった。かれは支配者がいかに「名」を「支配の道具」として利用したか、そのみがかれた「匕首」でみごとにえぐり出したのである。この点については、『魏晋の気風および文章と薬および酒の關係』（27）を読むとよくわかる。このなかで、魯迅は四・一二反共クーデター後の蒋介石の「三民主義」「革命」が、いかなる実体を持つものであるかを、曹操などの権力者を引きあいに出して煙幕を張りながら、みごとに指摘しているのである（曹操ははじめ人材を集めるときには、才能さえあれば「不忠不孝でもかまわない」といっておきながら、一方では、孔融を「不孝」の名目で殺した。したがって、このときの「孝」は、孝の実体そのものとは関係なく、ただただ孔融を殺すために必要な「名」にすぎなかったのである。蒋介石が反共クーデターを行なっているが、「三民主義」「革命」を称しているのも、それが利用できる「名」であるからにすぎない、と魯迅は暗に諷しているのである）。

魯迅が「名」にだまされることなく、現実の本質を見抜くことができたのは、もちろんかれのすぐれた資質にもよるが、さらに現実の闘争での経験によって、それに磨きをかけられたためである。とりわけ「血の教訓」によって、かれはいっそうきびしくこの発想を身につけたのであった。『花なきバラの二』（26）でかれはいっている。「実弾が打ち出したものは、青年の血なのだ。血は墨で書かれたたわごとにおおい隠されないだけでなく、墨で書かれた挽歌にも酔わされない。威力もそれをおさえきれない。